令和5年 9月1日（毎月1日発行）　赤十字新聞　第1000号　昭和24年9月30日　第三種郵便物認可

赤十字NEWS

Japanese Red Cross Society NEWS

SEPTEMBER.2023.
#1000
9

特集1

今考える、災害報道の役割と備えの大切さ

武田真一アナウンサー スペシャルインタビュー

Red Cross NEWS Since 1949
おかげさまで
祝1000号
記念増ページ
Anniversary

撮影地：日赤本社前

CONTENTS

特集2
日赤、そして国際赤十字の動きを史料と共にふりかえる
関東大震災100年「温故備震」展 …… P. 4-5

特集3
そのとき『赤十字NEWS』は何を伝えた？ …… P. 6

特集4
赤十字防災セミナーの新カリキュラム
「KAG」＆「ひなんじょ たいけん」で
防災・減災を考える …… P. 7

TOPICS
第49回フローレンス・ナイチンゲール記章 授与式
…… P. 8-9

災害救護報告
「令和5年6月29日からの大雨による災害」
「令和5年7月7日からの大雨による災害」における日赤の活動
…… P. 8

連載
輸血なるほどヒストリー …… P. 9

AREA NEWS
［新潟］　製菓・調理専門学校生が
手作りクッキーを配り献血協力を呼びかけ
［茨城・三重］　夏の恒例行事「トレセン」開催
アマチュア無線交信体験や
実践的フィールドワークも
／他 …… P. 10-11

WORLD NEWS
故郷を追われた難民や避難民の今 …… P. 12

Present!!

1000号記念
特別プレゼント

A賞　パナソニック
「ヘアードライヤー
ナノケア」
EH-NA0J-H
（ミストグレー）
2名様

B賞　日赤の車載用
防災セット
2名様

詳しくはP.11をCheck! ▶

日本赤十字社
Japanese Red Cross Society

人間を救うのは、人間だ。

赤十字新聞　編集・発行／日本赤十字社 広報室　〒 105-8521 東京都港区芝大門 1-1-3　TEL：03-3438-1311　一部 20円　赤十字新聞の購読料は会費に含まれています。

Red Cross NEWS Since 1949
おかげさまで 祝1000号 記念特集
Anniversary

SPECIAL FEATURE

武田真一アナウンサー スペシャルインタビュー

今考える、災害報道の 役割と備えの大切さ

アナウンサーとして、阪神淡路大震災や東日本大震災、熊本地震など、これまで数々の災害報道に関わってきた 武田さん。大規模災害を経て、今改めて考える、命を守るための災害報道の役割と在り方、そして、平時からの備えの大切さ について、お話を伺いました。

NHK時代の武田アナウンサー

熊本市に住む武田さんの義理の両親も、熊本地震では避難所生活を余儀なくされた（写真は避難所を訪れたときの武田さん）。「当時の避難所は床に雑魚寝状態。中学校の体育館の冷たく固い床の上で過ごす両親の身を、毎日案じていました」

HEADLINE

「未曽有の災害、その危機感を果たして伝えられていただろうか…」東日本大震災で感じた無力感

武田（たけた） 真一（しんいち）さん

Profile

1967年熊本県生まれ。1990年にNHKに入局し、『NHKニュース7』、『クローズアップ現代＋』など、看板番組のメインキャスターを長年務める。今年2月に同局を退社し、フリーアナウンサーへ転身。現在は日本テレビ系・朝の情報番組「DayDay.」のメインキャスターとして活躍中。

これまで報道の現場で経験してきた災害は、すべて心に刻まれています。その中でも大きな衝撃を受けたのは、やはり東日本大震災です。あらゆる局面で、“想定外”という言葉が使われたかと思いますが、災害報道に関わってきた私たちにとっても、これまでの常識が通用しない未曽有の事態でした。それまでも、被害を最小限に食い止めるための報道について考え、備えてきたつもりでしたが、そのマニュアルが通用しなかった。「私たちはこれまで何をやってきたんだ…」という無力感を感じました。

そして、それと同時に、自責の念も襲ってきました。あれほどの大きな地震と津波の被害は、誰しも想像し得なかったことかもしれません。しかし、私自身は2004年のスマトラ島沖地震（推定M.9.0）の際、インド洋沿岸を襲った津波の被害をニュースで伝えていましたし、特番のナレーションなど、さまざまな形で携わって、その怖さを知っていたはずなんです。それでも「日本で同じ規模の災害が起きたら、どう呼びかければいいのか」というマインドセットができていなかった…。世間の皆さんは、NHKのアナウンサーというと、“正確に、どんなことがあっても冷静に伝える”というイメージがあると思うんですね。私自身も、それでいいと思っていました。でも、「果たしてそうなのだろうか？」と。その後、災害報道のマニュアル改定に携わり、そのとき起きている災害のリアリティーや危機感を声色であったり、言葉の強さであったりで伝えることを重視してマニュアルを修正しました。私も伝え方として、「自分は大丈夫だろう」という思い込みを打ち破って、見ている人が「大変だ！ 逃げなきゃ！」と、椅子から立ち上がって行動を起こす、人々が自分の身を守るアクションへとつながる呼びかけを意識するようになりました。

「情報で命を守ることはできる」災害報道が、身を守る行動を起こすための『トリガー（引き金）』になるために

これだけ災害の多い日本において、今考える災害報道の役割は、二つあると思っています。一つは、災害が発生したときに、リアルタイムで命を守るための情報を報道すること。地震であれば、震度や津波の予測、台風であればその進路と勢力を伝えて、どう対処すればいいのかを伝える。そして、二つ目は、普段の皆さんの備えを高めるためのお手伝いをすることです。どちらかというと、これまでは前者に重きを置いてやってきたのですが、今すごく必要だなと思っているのは、実は後者です。ハザードマップを見て自分の住む地域のことを知ること。災害が起きたときに、どういうタイミングで行動して、どこに避難すべきか、その避難所までは何分かかるかという“マイタイムライン”を作ること。そういった備えに必要なことや、有益な情報の集め方を伝えて、災害対応力を高めるためのお手伝いをする役目も担っていると思います。そして、その備えがあった上で、実際に災害が起きてしまったとき、報道が身を守る行動に移すための“トリガー（引き金）”になるように、情報を発信する。災害報道にとって、“情報で命を守る”ということが最大の目標です。普段の備えと、行動に導くための的確な報道があれば、それが実現できると信じています。

「フェーズフリー」という考え方

私自身の備えはというと、水や簡易トイレなど、災害が起きて数週間はしのげるくらいの防災セットを用意して、定期的に見直したり、倒れて危険な高い家具は極力置かずに、心配なものは固定したりといった、最低限のことでしょうか。でも、備えようと思えばキリがないし、普段必要のないものを置くスペースもないという人も多くいると思います。それで、最近注目しているのが、「フェーズフリー」という新しい考え方です。平時と災害時でフェーズを分けるのではなく、普段使っているものがそもそも災害に強いものであったり、緊急時には別の用途にも活用できるなど、プロダクトや施設、サービスで身の回りを満たしておこうという考え方です。例えば、紙コップ。分量の目盛りを兼ねたストライプの模様をつけておけば、平時は単なるデザインの一部でも、災害時は避難所での調理や赤ちゃんのミルクを作るための計量カップになるというわけです。個々の備えももちろん大事ですが、国、地域、企業と、社会全体が日常からいかに災害を想定しておくかが、これからの課題だと思っています。

「1人でも多くの方を救えるように」ではなく、目指すべきは「1人も命を失わせない」備え

日赤の防災・減災の普及、啓発活動も、「災害報道で命を救いたい」という、私たちの思いに通じるように思います。自分の身を守ることだけでなく、被災して困難な局面にいる人々を救いたい、さらには、健康などさまざまな面で不安を抱えている人のお手伝いをしたいという思いが、その活動から感じられます。私と妻は熊本の出身ですが、2016年の地震の直後、熊本で暮らす私たち夫婦の高齢の親を支えてくれたのは近所の方々でした。災害時、高齢者1人では身を守れない。地域のつながりを大切にし、地域の総合的な防災力の向上を目指す、防災啓発の考え方には共感ができます。

東日本大震災まで私は「1人でも多くの人を報道で救う」と思ってやってきましたが、あれほどの被害を目の当たりにして「1人でも多く」とか「被害に遭われる方を減らす」という考え方では駄目だと考えるようになりました。何よりもまず「1人も命を失わせない」という強い決意で、今までのシステムを徹底的に見直して変える。プリンシプル（原理・原則）を掲げて、そこからバックキャスティング*していく。皆が備えることが大切ですが、備えられない人は命が守られなくても仕方がないなんてことはないのだから、社会として「1人も命を失わせない」を考えていく必要がある。赤十字NEWSの読者の皆さんには「どうしたら、1人も命を失わせない社会を実現できるか、一緒に考えていきませんか」と呼び掛けたいですね。「誰の命も失わせない」という社会全体の合意が重要だと思うのです。

＊未来や目標を起点にし、逆算して解決策を考える思考法

「フリーとなって、今だからできる形で被災地に寄り添い、私なりの防災・減災活動を続けていきたい」と語る武田さん

ゲーム体験をしていただきました！

9月から新たに始まった日赤の防災カリキュラム「ひなんじょ たいけん」に触れる武田さん。

「さまざまな家族構成や健康状態の避難者を想定して考えられ、いいシミュレーションになりますね」

※日赤の防災啓発の取り組み、「赤十字防災セミナー」についてはP.7に

Red Cross NEWS Since 1949
おかげさまで 祝1000号 記念特集
Anniversary

日赤、そして国際赤十字の動きを史料と共にふりかえる

誌上展示会 関東大震災100年「温故備震（おんこびしん）」展

1923年に発生した関東大震災から今年で100年を迎えるにあたり、日赤では本社やオンライン上で「温故備震」展を開催しています。今回はその一部を紙面にてご紹介します。日赤に残る史料をひもといていくと、多くの人々が救助や支援活動に懸命に取り組んだ姿を感じられると共に、当時の日赤の先進的な災害対策から、今の私たちが備えるべき防災のヒントが見えてきます。

赤十字WEBミュージアム「温故備震」ページはこちら ▶

GALLERY 1 地震発生直後、同日に皇居前広場へ救護用テントを設置

発災当日に設置した救護所を描いた、洋画家の二世 五姓田芳柳（ごせだほうりゅう）作の絵画「関東大震災当時の宮城前本社東京支部臨時救護所の模様」（日赤東京都支部 所蔵）を、本展の象徴的な１枚としてキービジュアルに使用

皇居前広場救護所 大テント内の活動状況

救護所大テントと赤十字マークのついた救護自動車

1923年9月1日、午前11時58分に発生した関東大震災。日赤は、同日のうちに100坪を超える救護用テントを東京・千代田区の皇居前広場に設置し、多くの傷病者の医療救護を開始しました。電気をはじめとするインフラが停止し、夜を迎える皇居前において、日赤のテントだけがランプの光に照らされ、そこを目指して傷病者や焼け出された人々が集まったといいます。広場には約30万人の避難者がひしめきあい、混乱を極める中で日赤の医師や看護師が治療を行ったほか、日赤職員が4斗樽を持って井戸を往復し避難者に水を配布しました。

GALLERY 2 赤十字救護班、全国46支部と海外から結集

救護機関配置図（東京）

浅草臨時救護所の石川支部救護員

地震発生直後から東京や神奈川などの救護班が直ちに活動を開始し、翌日には群馬、栃木、長野、福島、宮城などの支部から応援救護班が派遣され、その後も全国各支部、朝鮮や満州委員部から駆けつけた救護員が配備されました。東京・神奈川方面の救護所で活動した日赤の救護員は1663人で、救護した患者は実人数17万5471人、延べ人数41万1621人にのぼり、翌年1月まで132日間活動した救護所もありました。

GALLERY 3 日本各地に救護所を設立し、多くの被災者を支援

全国救護所配置図（東京、神奈川以外で計73カ所）

津波被害を受けた館山に設置した日赤千葉支部救護所

この地震によって全国に逃れた避難者は約200万人にのぼりました。日赤では、東京で救護所51カ所が稼働したほか、北海道や新潟、大阪、鹿児島など32支部が各地の主要駅や港を中心に73カ所の救護所を設置。自治体や青年団、病院と協力して避難傷病者の救護を行いました。地方の救護所では、医師、看護師、事務員など計641人の救護員が救護活動に従事し、救護を受けた患者実数は3万3442人、延べ人数は5万2963人に達しました。また、日赤の病院船だった「博愛丸」「弘済丸」も日本郵船によって、大きな被害を受けていた鉄道の代わりに、人や物資の輸送手段として使用されました。

GALLERY 4 妊産婦のケアと乳児の保護

日赤の乳児保護施設

本郷臨時産院で乳児を沐浴

日赤では被災した妊産婦を受け入れるため、病院内の産院を拡張したほか、臨時産院・臨時乳児院を設置。387人の乳児を保護、1991人の新たな生命が生まれました。

GALLERY 5 最大の支援国アメリカ、国際赤十字の連携

アメリカ赤十字社が設置した、震災により生じた地割れの上に建つ麻布の臨時テント病院

イタリア赤十字社寄贈のバラック

資金援助を含め最大の支援国となったのはアメリカで、9月6日には同国から救護団が到着し、救援物資の配布やテント病院などを設置。また、世界30カ国近くの赤十字社、各国の団体や個人から人材派遣や物資・資金の支援がなされました。

GALLERY 6 日赤ボランティアの活動

乳児の世話をするボランティア

アメリカからの一行を慰労するボランティア

日赤の最初の奉仕団体である篤志看護婦人会では、全国各地域の支会を動員して物資や寄付金を集めて配給したほか、少年赤十字（現青少年赤十字）が救護所への食糧の運搬を行うなど、被災者に寄り添った支援活動は、現在の日赤のボランティア活動に通じるものです。

Red Cross NEWS Since 1949 おかげさまで 祝1000号 記念特集 Anniversary

そのとき『赤十字NEWS』は何を伝えた？

昭和24年に創刊し、今号で1000号を迎えた『赤十字NEWS（旧赤十字新聞）』。日赤の機関紙である本紙の情報発信は、国内外の災害と共にありました。今回は、災害直後に発行された紙面と共に、その災害を通して培われた日赤の活動を紹介します。

H16年 新潟県中越地震災害

当時 赤十字NEWSはこう伝えた！

点在する避難所や自家用車に寝泊まりする方々のための巡回診療を報告。当時は一般に浸透していなかった「エコノミークラス症候群」を防ぐ活動や、国内初のdERU（国内型緊急対応ユニット）の展開も伝えました。

現在は… 早い段階の「こころのケア」で被災者の命を守る

地震から少し時間が経ってから心的ショックや避難生活の精神的ストレスが原因の災害関連死が多く発生。そのため日赤は、地震発生直後から「こころのケア」を実施。被災状況に応じて「こころのケアセンター」を設置するなど現在の取り組みにつながっています。

H16年の紙面

H28年 熊本地震

H28年の紙面

当時 赤十字NEWSはこう伝えた！

被災者に寄り添う日赤の詳細な活動を紹介し、被災地のリアルな現状を知ってもらうことを目指しました。被害状況の数字では見えてこない、現地の人々が「何を求めているか」を伝え、支援の輪を広げていくことも赤十字NEWSの使命です。

現在は… 長い避難生活における心と体を守るための知識を普及

長期間の避難生活を送る人々に対する、こころのケア、感染症対策やエコノミークラス症候群予防のアドバイスなどの支援活動により、個々の安全や健康を守るための知識を提供することの重要性を認識。翌年からは「赤十字防災セミナー」の全国展開を始めました。

H7年の紙面

H7年 阪神淡路大震災

当時 赤十字NEWSはこう伝えた！

凄惨な被害状況を伝えると共に、赤十字病院や避難所において、日赤の職員、ボランティアが救護活動を行う様子を報告。全国から派遣された救護班の活動のほか、国際赤十字から届く安否調査への対応など、日赤のネットワークを生かした多岐にわたる取り組みを紹介しました。

現在は… 災害時のボランティアの活動をサポート「こころのケア」拡充も

阪神淡路大震災でのボランティア活動は、後に「ボランティア元年」と呼ばれ、現在の赤十字ボランティアの多様な活動につながっています。また、目に見えるけがだけでなく、地震により精神的にダメージを負った人々をケアする重要性が見直された契機であり、ここでの学びが、日赤の「こころのケア」活動のベースとなっています。

S34年 台風15号（伊勢湾台風）

S34年の紙面

当時 赤十字NEWSはこう伝えた！

死傷者や行方不明者の数から、当時、史上最大規模の被害をもたらした台風であることを知らせると同時に、台風の上陸時から近隣の各支部より救護班を派遣したこと、義援金の受け付けや物資の配布状況を発信。日赤の活動と、全国からの支援が現地に届いていることを伝える媒体としての役割を果たしました。

H23年 東日本大震災

H23年の紙面

当時 赤十字NEWSはこう伝えた！

被災地に派遣された日赤職員は延べ7千人。被災地に寄り添う日赤の活動、その思いを伝えながら、世界にも広がる支援の輪を紹介。多くの人が被災地に思いを寄せるきっかけを生みつつ、復興に懸ける人々の力となるべく情報を発信し続けました。

現在は… 防災啓発事業を本格化 次世代へと思いをつないでいく

未曽有の大災害において、総力を挙げて取り組んだ被災地支援。医療救護やボランティアによる支援、こころのケア、救援物資や義援金の受け付けなど日赤がこれまで培ってきた経験と知識をもとに活動を展開。さらに、この震災で得た知見や記録をもとに、日赤では災害対応能力を強化させ、同時に青少年赤十字事業における防災教材の制作を始め、次世代の防災への意識と力を育む防災啓発事業を本格化。現在も進化を続けています。

S24年 赤十字NEWS創刊
S33年 台風22号（狩野川台風）
S34年 台風7号風水害
S28年 西日本・近畿および台風13号
S39年 山陰北陸豪雨
S39年 新潟地震
S35年 チリ地震津波
S41年 新潟県集中豪雨
S42年 新潟、山形8月豪雨水害
S47年 広域豪雨水害
S51年 台風17号災害
S60年 長野市地附山地滑り
H5年 北海道南西沖地震災害
H12年 有珠山噴火
H16年 福井県豪雨災害
H16年 新潟・福島豪雨災害
H16年 福岡県西方沖地震災害

赤十字防災セミナーの新カリキュラム

「KAG」&「ひなんじょ たいけん」で防災・減災を考える

Red Cross NEWS Since 1949 おかげさまで 祝1000号 記念特集 Anniversary

災害時に身を守るための家具の安全対策を学ぶ「家具安全対策ゲーム（KAG）」と、避難所を仮想体験する「ひなんじょ たいけん」。今年度からスタートした二つの防災シミュレーションカリキュラムをご紹介します。

「KAG（カグ）」とは？

日本人の平均在宅時間は1日約16時間※1、また平均睡眠時間は、7時間12分※2というデータがあります。家で過ごす多くの時間が就寝時間と考えると、その一番無防備な状態で大きな災害が起こったら…と、想像したことはあるでしょうか？ 実際、朝方5時46分に発生した阪神淡路大震災では、家具の下敷きやガラスの落下によるけがが全体の約7割以上を占めました。就寝中の家具による事故を防ぎ、家の中にけがの原因が潜んでいるという危機感を高めて、日常から備えるために、今年度から日赤の防災教育事業の一環として登場したのが「KAG（カグ）」。家具の転倒や落下、移動による地震被害を最小限に食い止めるためのもので、ゲームは実際に自宅の平面図を描き起こすことからスタートします。家具の配置で危険な箇所を把握して、地震が発生したときに、自分はもちろん、家族の命を守るためにはどういった対策が必要か、ゲーム形式で学んでいくプログラムです。

※1 NHK放送文化研究所「国民生活時間調査（2015）」より
※2 同研究所「国民生活時間調査（2020）」より

「KAG」に参加しました！

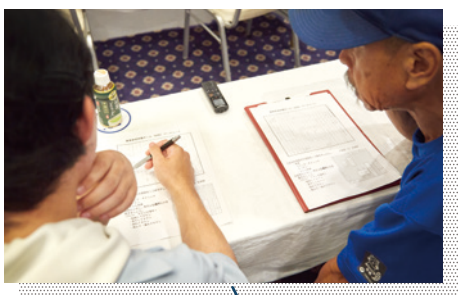
野上 翔市さん

Profile
のがみ・しょういち
●岡山県出身。高校時代に平成30年7月豪雨の被災地ボランティアを経験したことから、防災・減災にも関心を持つようになり、今回の「KAG」体験に参加。現在は山口県内の大学に通いながら、山口大学学生赤十字奉仕団のメンバーとして活動中。

「KAG」体験リポート

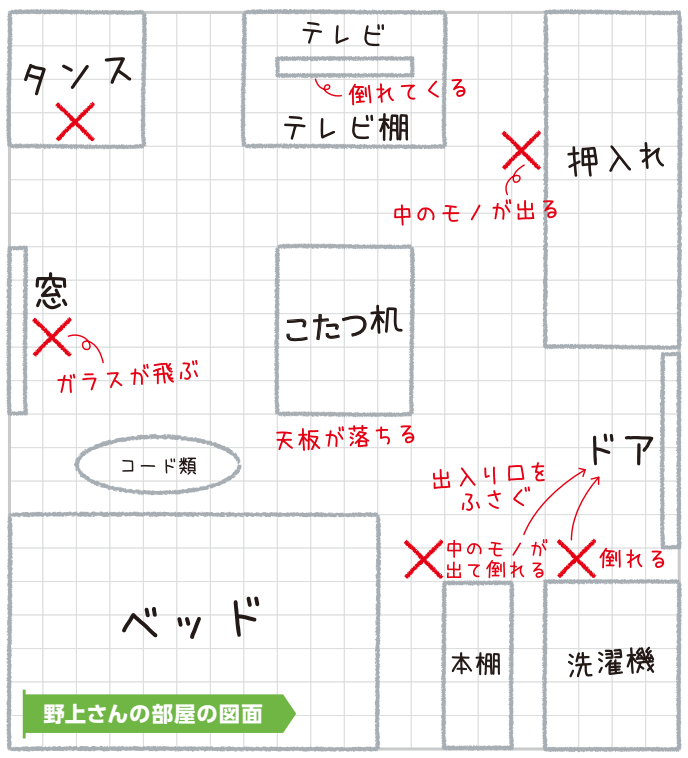
日赤山口県支部の赤十字防災セミナーの一環で実施された「KAG」。冒頭、日赤職員によって、家の中の危険な場所や安全なスペースを確保するための対策法についてレクチャーがありました。その後、用意されたワークシートに自宅の家具の配置を描く時間が設けられ、危険なポイントを自ら考える機会に。そして、他の参加者とディスカッションすることで、さらに安全対策の理解を深めました。

KAG講習の冒頭、“家の中の危険”についての講演を聞き「ぼくの部屋はベッドのすぐそばに本棚があって、就寝中に地震が起きたら、と考えたら、枕の位置が危ないかも…」と、野上さん



隣の方の考えを聞き、多くの気づきを得た野上さん。「“窓ガラスが割れたときに素足では歩けないから、非常用の靴を枕元に置いておくといい”と言われ、目から鱗です」。自分の図面で×印も追加します

家具の配置を描いたら隣の方と意見交換。「ご自身も被災経験があり、防災ボランティアもされている方なので、具体的なアドバイスをもらえました。他の人の視点って大事ですね！」



家具の配置と共に、倒れる、割れる、飛び出すなど、危険な箇所に×印をつけていく

「本棚や洗濯機がドア近くにあり、家具が倒れたら出入り口を塞いでしまうと気づきました」と、発表。講習後、周りの学生にも家の防災に興味を持ってほしい、と感想を述べました

「ひなんじょ たいけん」とは？

いつ起こるかわからない大規模災害を想定して、「避難者の目線」で避難所における「自助」と「共助」の力の向上を目的としたカリキュラム。今秋、日赤オリジナルのアレンジでリリースされました。

用意されるのは、避難所に見立てた平面図と、世帯ごとに避難者の年齢や健康状態、被災状況が書かれたカード。5～7人のグループになって、避難者に見立てたカードを引きながら考えていきます。「病気の家族がいる場合」「避難所のトイレが使えなくなった」など、さまざまな出来事、課題にどう対応していくか、意見交換しながら気づきを深めることで「避難者」を疑似体験できるカリキュラムです。

赤十字防災セミナーに参加しませんか？ 詳しくは →

TOPICS

1 TOPICS 第49回フローレンス・ナイチンゲール記章 授与式

世界中の看護師にとって最高の栄誉である「フローレンス・ナイチンゲール記章」。第49回となる今回、日本からは髙原美貴さん、草間朋子さん、今村節子さんの3人が受章し、日本赤十字社名誉総裁である皇后陛下から記章が授与されました。

7月27日、東京・港区にある東京プリンスホテルにて、日本赤十字社名誉総裁の皇后陛下、名誉副総裁の常陸宮妃華子殿下、寛仁親王妃信子殿下ご臨席の下、第49回フローレンス・ナイチンゲール記章の授与式が行われました。

同記章は、看護活動に顕著な功績を果たした看護師を顕彰するもので、近代看護を確立したフローレンス・ナイチンゲール氏の生誕100周年を記念して、1920年に創設。2年に一度、赤十字国際委員会の選考によって、紛争や災害時の看護活動、公衆衛生や看護教育などに顕著な貢献をした世界中の看護師の中から、受章者が決定します。今回は22カ国、37人に贈られ、これまでの受章者総数は1580人、そのうち日本人の受章者は、今回の3人を含め115人と、世界最多となっています。今年の授与式は、4年ぶりに看護学生によるキャンドルサービスも行われ、灯をともしたろうそくを手にした72人の看護学生が会場を回ると、場内は厳粛な雰囲気に包まれました。

今回の受章者・髙原さんは、1987年から姫路赤十字病院に勤務。1999年にスーダン紛争犠牲者救援活動に携わって以来、これまで11カ国17回の国際救援活動を経験しました。2002年に従事したアフガニスタン紛争犠牲者救援では、地雷を受けた遺体を「整体※」して家族に引き渡す技術を病院スタッフに伝授するなど、宗教や文化を尊重した人道を実践しています。

名誉総裁・皇后陛下から授与される髙原美貴さん

草間さんは、2011年の原子力発電所事故の経験から、被災者の放射線に対する思いや不安に対峙した活動を目指して、一般社団法人日本放射線看護学会を立ち上げ、放射線看護活動を国際的に拡大していく活動を展開しました。また、昨今では原子力災害保健支援チーム（NuHAT）を編成し、原子力災害発生時に放射線看護専門看護師を活用し、機動性のある支援ができる体制づくりに注力しています。今村さんは、日本の国立大学初の看護学科となる東京大学医学部衛生看護科の草創期における教育体制の構築に尽力、「看護は論理的で科学的」という概念を日本の看護教育に与えました。また、地域の健康問題にも関心を寄せ、地域医療を担う看護師のキャリア開発のための法人を設立し、学生への奨学金事業を創設するなど、地域看護力向上のための活動にも取り組んでいます。

受章を受けて、髙原さんは、「栄誉ある章をいただき、私でいいのかという戸惑いと同時に、私を推薦してくれた周りの方たちへの感謝が込み上げました。今後も紛争が起きている地域で懸命に生きている人たちを支えるため、救援活動を続けていきたいです」と語りました。

諏訪赤十字看護専門学校、姫路赤十字看護専門学校の生徒によるキャンドルサービス

※1985年に発生した520人が亡くなった航空機墜落事故の際に、故人の体形を遺族から聞き取り、その場にある資材を利用して、「損傷のひどい遺体を生前の姿にできるだけ似せて整復する方法」として、日赤の看護師が救護活動として実施したもの

受章者 たかはら みき **髙原 美貴さん**
姫路赤十字病院 看護副部長

数々の国際救援活動を経験し、現在はシリアで国際赤十字・赤新月社連盟（IFRC）の保健医療コーディネーターとして活動する髙原さん。授与式後の講演会では、これまで訪れた国々の現地の様子を画像で振り返りながら、「私のように、こうして自分の活動を認めてもらって素晴らしい章をいただけるのは夢のようなこと。多くの人たちは、誰にも評価されることのない日の当たらない場所で、今日も必死に救援活動を行っています」と語りました。式典後に名誉総裁と交わした会話については、「私たちが『日赤の看護師は強いと言われますが、赤十字が私たちを強くしてくれたのです』と話すと、皇后陛下は笑みを浮かべながら、深く納得されたご様子でした」と振り返りました。

8月号の髙原さん オンライン記事はこちらから ▶

受章者 くさま ともこ **草間 朋子さん**
東京医療保健大学 名誉教授
大分県立看護科学大学 名誉学長

放射線の対人影響を長年研究してきた草間さん。「科学としての放射線影響を患者さんや被災地の住民の方々に理解していただくためには、一番身近な看護師の役割が大きい。今後も、放射線専門看護師の育成や原子力災害の支援体制の構築に邁進していきます」と語りました。

受章者 いまむら せつこ **今村 節子さん**
公益社団法人教育・ヘルスケア振興節英会 理事
鹿児島中央看護専門学校（3年課程）顧問

98歳の今もなお、地元鹿児島県で看護機能を生かした地域共生社会に尽力する今村さん。授与式・講演会には、長男の今村英仁さんが代理で登壇され、「現在は、母と共に看護小規模多機能型居宅介護施設*の展開を見据えて準備しています」と、近況を伝えました。

＊利用者や、その家族の状況に合わせて24時間365日、「通い」「泊まり」「訪問看護（看護・介護）」のサービスを一体的に提供する施設

赤十字NEWS 9月号 災害救護報告

「令和5年6月29日からの大雨による災害」「令和5年7月7日からの大雨による災害」における日赤の活動

今年6月末からの梅雨前線の影響により発生した大雨は、青森県、秋田県、富山県、石川県、島根県、山口県、福岡県、佐賀県、大分県の39市町村に災害救助法が適用される甚大な被害をもたらしました。日赤各支部は、被災地に職員を派遣し、避難所や被災住宅への巡回による健康観察、救援物資の配布などを行うとともに、赤十字ボランティアによる被災住宅の片づけや炊き出しなどを実施しました。さらに詳しい活動状況は、日赤WEBサイトの災害救護速報をご覧ください。

災害救護速報（国内）についてはコチラ

避難所で健康観察を行う日赤看護師（秋田県秋田市）

被災住宅の泥出しを行う赤十字ボランティア（石川県河北郡津幡町）

職員の派遣状況	
秋田県支部、秋田赤十字病院	53人（救護班1班4人、事務職員2人、日赤災害医療コーディネートチーム11人、こころのケア班36人）
宮城県支部、仙台赤十字病院、石巻赤十字病院、石巻赤十字看護専門学校	7人（こころのケア班）
福岡県支部、福岡赤十字病院、今津赤十字病院、嘉麻赤十字病院	22人（看護師等）
唐津赤十字病院	13人（看護師等）
鳥取赤十字病院	1人（日赤災害医療コーディネートチーム）

救援物資の配布状況	
秋田県支部	毛布320枚、緊急セット229セット、安眠セット49セット、段ボールベッド2個
富山県支部	緊急セット80セット、タオル類2100枚、石けん80個
山口県支部	毛布180枚、安眠セット12セット
福岡県支部	毛布50枚、緊急セット522セット、安眠セット180セット、タオル類1050枚、医療品セット550組、消毒液700リットル
佐賀県支部	毛布60枚、緊急セット36セット、安眠セット60セット、タオル類120枚
大分県支部	緊急セット84セット、安眠セット10セット、タオル類420枚、ブルーシート80枚

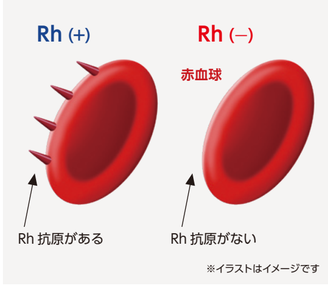
輸血の歴史やトリビアが満載！ 輸血なるほどヒストリー vol.3

監修 日本輸血・細胞治療学会名誉会員 髙本 滋 先生

【輸血にまつわるさまざまなエピソードを紹介する連載コーナー。今回は、「Rh式血液型の発見」について紹介していきます。】

ABO式から40年後のRh式血液型の発見
多様な血液型の研究が安全な輸血を可能にする

1900年にウィーン大学教授のラントシュタイナー（Landsteiner）がABO式血液型を発見してから40年後、その弟子であったウィーナー（A.S.Wiener）が、Rh式血液型の発見につながる新たな抗原について発表をしました。前提として、血液型は、血球の表面や内部にある抗原と呼ばれる物質の有無によって判別されます。この研究では、アカゲザルの血球でウサギを免疫して作られた抗体が、白人の約85%の血球を凝集し、約15%を凝集しないという結果が出ていました。これは、従来のABO式血液型とは異なる抗原を持った血液型の発見でした。血液の研究者の1人で、多くの血液型を発見したリヴァイン（Philip Levine）は、ウィーナーらの発表を受け、前年に分娩時に出血した妊婦への輸血で激しい副作用が起きた事例を調べ、Rh式血液型の抗原に起因するものだったことを突き止め、血液型のメカニズムの解明につなげました。ちなみに、Rh式血液型は、アカゲザル（Rhesus monkey）の頭文字を取ったもので、その中でもヒトの抗体であるD抗原は、ラントシュタイナーとウィーナーの頭文字を取りLW抗原と呼ばれています。



人の赤血球にアカゲザル（Rhesus monkey）と共通の血液型抗原「Rh 抗原」がある場合は、「Rh+（Rh 陽性）」、同抗原がない場合は「Rh−（Rh 陰性）」となる

Rh式血液型の発見当時は第二次世界大戦の最中でしたが、血液に関する研究はアメリカやイギリスを中心に地道に続けられ、その後数年のうちにRh式血液型の5種類の因子や新たなルイス式血液型なども見つかり、今日、国際輸血学会が認定している37種類のヒトの血液型をひもといていく礎となっています。

AREA NEWS

エリアニュース

全国各地、あなたの生活のすぐそばで
日本赤十字社の活動は行われています。

九州 九州初！ 新幹線による血液輸送のトライアル

7月26日、九州ブロック血液センターとJR九州との共同の取り組みである、第2回新幹線搬送トライアルを実施しました。この取り組みは、大雨、台風などの荒天時に高速道路が通行止めになった際、輸血用血液製剤および原料血液の代替運搬手段として新幹線を利用することを目的として、実運に向けて検証を重ねているものです。1人でも多くの命を救うために、天候に関わらず、いつ何時も医療機関に安定的に輸血用血液製剤を供給することができるよう、検証を進めていきます。

新潟 製菓・調理専門学校生が手作りクッキーを配り献血協力を呼びかけ

新潟県赤十字血液センターでは、若い世代に献血への関心を持ってもらうため、「にいがた製菓・調理専門学校えぷろん」と連携した取り組みを行っています。7月に同校での献血を実施し、まずは学生たちの献血への理解を深め、その後7月24日～28日には、献血ルームで協力してくれた方に、パティシエの卵である学生たちの手作りクッキーをプレゼント。クッキーを作成した学生は、「何度でも、献血ルームに来てくれたらうれしい」と語り、継続的な協力を笑顔で呼びかけていました。

茨城・三重 夏の恒例行事「トレセン」開催 アマチュア無線交信体験や実践的フィールドワークも

青少年赤十字（JRC）の教育プログラムの一つ、リーダーシップ・トレーニング・センター（トレセン）。日赤茨城県支部（❶）は、7月28日に北茨城市地区で開催し、小中学生JRCメンバー44人が参加。今回は県内初の試みとして、赤十字アマチュア無線奉仕団による無線講座も。メンバーは初めて触れる無線機に興奮しながらも、離れた場所にいるペアと順番に質問しあうなど、災害時に活用されるアマチュア無線について知る機会となりました。

三重県支部（❷）では、4年ぶりに2泊3日の宿泊を伴うトレセンを実施。小・中・高等学校と各校種に分かれ、高校トレセンにはJRCメンバー36人、指導者12人が参加。関所ごとに課題をクリアするフィールドワークは、JRCの高校生リーダーと次期リーダーたちが中心となって運営。目隠しで行動したり、野外のがたつく道を車椅子で移動するなど、障害のある方の体感とそのサポートも学びました。

愛媛 「安心して登山ができるように」霊峰・石鎚山で救護活動

西日本最高峰であり、名物とも言えるいくつもの鎖場（岩場を登るため鎖が取り付けられた場所）があることで知られる石鎚山。7月1日～10日の「お山開き大祭」で、日赤愛媛県支部、松山赤十字病院、赤十字ボランティアによる救護活動が行われました。消防や警察とも連携をとりながら、けがや脱水で動けなくなった方に対しての応急処置を行い、時には傷病者を担架に乗せて山を下ることも。登山者からは、「赤十字さんがいてくれたから安心して山を登ることができました」との感謝の言葉をいただきました。

福岡 韓国の小学生と「ハッケヨイ！」5年ぶりに国際交流が再開

大韓赤十字社釜山広域市支社との姉妹協定に基づき、平成14年度から毎年、青少年赤十字（JRC）小学生メンバーの受け入れ、派遣を通じた国際交流を実施している日赤福岡県支部。コロナ禍を経て5年ぶりに交流が再開し、釜山市の小学生たちを招き入れ、JRCメンバーの家庭がホストファミリーになって交流を深めました。受け入れ校主催による「八木山小学校相撲大会夏場所」は、日本の文化を肌で感じる機会に。参加した韓国メンバーは「ホームステイで体験した花火や水族館、BBQ、そして相撲大会も、すべて楽しかった」と語り、メンバー同士、言葉の壁を超えてお互いの理解を深めた様子でした。

佐賀 「救急法講習を受けていてよかった！」AEDで救命サポートをした高校生が表彰

救命処置によって男性の命を救ったとして、佐賀県立唐津西高等学校2年生の田中哲史さんに、唐津市消防本部から感謝状が送られました。田中さんは、3月に日赤佐賀県支部が行った救急法短期講習を受講。そのとき学んだことを生かし、野球部の練習試合前にグラウンドで男性が突然意識を失った際に、大人3人と救命処置を開始。「AEDを持ってきて！」の指示に、素早く反応し校舎にダッシュ。男性は一命を取り留めました。「講習でAEDの場所を知っていたおかげ。講習を受けていてよかったです」と当時を振り返って笑顔を見せました。

千葉・大分 水の事故ゼロを目指して楽しみながら学ぶライフセービング

水の事故が頻（ひん）発する夏季、各支部では楽しく水上安全法を学ぶためのコンテンツや講習を用意しています。

日赤千葉県支部（❶）では、7月23日に稲毛海浜公園・いなげの浜にて、海上保安庁千葉海上保安部の協力の下、「赤十字ジュニア・ライフセービング教室」を開催。ペットボトルやランドセルなど、身近な浮き具を使った浮き体験や、ライフジャケット着用体験、レスキューボード体験などを通して、命を守る技術を学ぶだけでなく、海の楽しさにも触れる機会となりました。参加者からは、「危険だと思った時こそ、慌てずに対処することが大切だと思いました」などの感想が寄せられました。

大分県支部（❷）では、ヒーローや悪役が登場するオリジナル動画「人道人間クロスレッド」第3弾を公開中。この動画では「恐るべし水の事故！ ゼロツー参上！！～着衣泳・陸上からの救助編～」と題し、溺れたとき、溺れた人を見つけたときの対処法を紹介しています。

大分県支部の動画はこちらから

赤十字は、動いてる！ SAVE365

ACTION! 防災・減災キャンペーン

9月の防災・減災キャンペーンとして、日赤のアンバサダーである上白石萌音さんがナビゲーターとなり、災害への備えをわかりやすく紹介するWEBサイトがオープンしました！

このサイトでは、上白石さんが地域の防災について考える「災害図上訓練（DIG）」というゲームを体験している様子を収録したWEB CMを公開中。また防災・減災への理解を深めるコンテンツとして、マガジンハウスの雑誌『POPEYE』『anan』『Hanako』とのコラボ記事も掲載しています。他にも知っておきたい備えのアドバイスをする『防災・減災 備えるMAP』や、Hanako編集部がピックアップした防災アイテムが購入でき、しかも売上の一部が日赤に寄付される『SAVE365ショッピング』など、盛りだくさんのコンテンツをご用意しています。

ぜひ、この機会にアクセスしてみてください。

■ 防災・減災 備えるMAP（WEBサイト）

「知って安心！『防災・減災 備えるMAP』」として、「家の中の防災」「避難所の環境」「赤十字防災セミナー」など、もしものときに役立つ知識をわかりやすく解説＆アドバイスします

■ WEB CM

CM動画の撮影で「DIG」を体験した上白石さん。このWEB CMはキャンペーンサイト内で視聴可能です

キャンペーンサイトはこちらから

Present!! 1000号記念 特別プレゼント

A賞 パナソニック ヘアードライヤー ナノケア

「より良いくらし」と「持続可能な地球環境」の両立を目指すパナソニックから、環境に配慮した植物由来塗料（バイオマスペイント）とプラスチック使用量を約95%削減した包装材を用いた「ヘアードライヤー ナノケア」EH-NA0J-H（9月1日発売）をプレゼント。同製品シリーズの売り上げの一部は、海の保全活動に寄付されます。

nanocare
パナソニック
ヘアードライヤー ナノケア
EH-NA0J-H（ミストグレー）

2名様

※印刷の関係で、実際の製品と写真の色が異なる場合があります

B賞 日赤の車載用防災セット

非常用トイレ、長期保存水など車に常備しておきたい防災アイテム16点がこの1箱に！

2名様

プレゼント希望者は、以下の項目を明記のうえ、郵送・WEBでご応募ください。
①お名前 ②郵便番号・ご住所 ③電話番号 ④年齢 ⑤赤十字NEWS9月号を手にされた場所（例／献血ルーム） ⑥希望賞品（A／B） ⑦9月号読者アンケートの回答
※ご応募いただいた個人情報はプレゼントの発送および弊社からのお知らせのみに利用いたします

〈⑦ 9月号読者アンケート〉質問項目

【A】赤十字の活動の中でよく知っている事業はどれですか
ア. 国内災害救護 **イ.** 国際活動 **ウ.** 赤十字病院 **エ.** 看護師等の教育 **オ.** 献血（血液事業） **カ.** 救急法等の講習 **キ.** 青少年赤十字 **ク.** 赤十字ボランティア **ケ.** 社会福祉
※上記選択から**ア～ケ**の文字をご記載ください。複数選択可

【B】今回、赤十字NEWSを読んで、赤十字の活動の中で理解が深まったのは上記**ア～ケ**の事業のどれですか ※複数選択可

〈⑦ 9月号読者アンケート〉質問項目・続き

【C】赤十字NEWSの適切な大きさは
ア. 今のまま **イ.** A4サイズ **ウ.** 小冊子（A5 148×210㎜）サイズ

【D】現在の赤十字NEWSの読みやすさ
ア. 読みやすい **イ.** 読みにくい：その理由（文字量が多い/少ない、レイアウトが悪い、写真が多い/少ない、ページ数が多い/少ない）

【E】赤十字NEWSの発行回数は何回がよいですか
ア. 月に1回 **イ.** 2カ月に1回 **ウ.** 3カ月に1回 **エ.** 4カ月に1回

【F】その他、赤十字NEWSに関するご意見、ご要望

郵送／〒105-8521東京都港区芝大門1-1-3
日本赤十字社 広報室 赤十字NEWS
9月号プレゼント係
WEB応募／下の2次元コードからご応募ください。
9月29日（金）必着
※当選者の発表はプレゼントの発送をもって代えさせていただきます

ご応募はこちらから

WORLD NEWS

—ワールドニュース—

故郷を追われた難民や避難民の今

2022年末時点のUNHCR[1]の統計[2]によれば、紛争や迫害などから逃れるために故郷を離れなければならなかった人々が世界には約1億840万人います。今回は、難民や避難民の方々の日常にスポットを当てます。

難民とは「人種、宗教、国籍、政治的意見または特定の社会集団に属するという理由で、自国にいると迫害を受ける恐れがあるために他国に逃れ、国際的保護を必要とする人々」のことを言います。一方、避難民は難民と同様な理由、もしくは紛争などによって、住み慣れた家を追われた人々のことで、難民認定は受けていません。状況が改善されれば、故郷に戻りたいという思いから国内にとどまっている人々や、障害やさまざまな理由で国境を越えた移動が困難になった人々は国内避難民と呼ばれています。**6月20日の「世界難民の日」に合わせ、日赤国際部のSNSでも投稿した**シリアやレバノン、ウクライナ、ドイツ、バングラデシュ、エチオピアで避難生活を送る人々と日赤や国際赤十字が行う支援を紹介します。

1：国連難民高等弁務官事務所　2：UNHCR - Refugee Statistics

SYRIA

【場所：シリア キーワード：パレスチナ難民】

2023年2月に発生したトルコ・シリア地震直後に行われた、パレスチナ赤新月社シリア支部のパラバルーンによる心理社会的支援。パレスチナ難民は75年前に故郷を追われて以来、パレスチナ自治区や隣国などに逃れて生活しています。パレスチナ赤新月社はこうした国や地域に支部を構えて活動しています。

LEBANON

【場所：レバノン キーワード：パレスチナ難民】

レバノンのパレスチナ難民キャンプ内の病院で、日赤医療センター看護師の宇賀本さおりさんが、自身も難民であるラファ医師と救命救急の手技の確認を行う場面。レバノン内のパレスチナ難民は移動に制限があるため、日本の医療従事者が日々行っているような医療技術の更新も難しい状況にあり、現地の医療の質を高めるための支援は重要です。

GERMANY

【場所：ドイツ キーワード：ウクライナ人道危機】

ウクライナ人道危機が続くなかで、安全を求めて逃れた避難民の受け入れは、ウクライナ国内だけでなく近隣諸国にも広がり、武力紛争が激化した当時ドイツには毎日何千人もの人々が到着しました。写真は、ドイツで避難民支援のための登録手続きを行う赤十字スタッフの様子。国を超えて支援を行うことができる国際赤十字のネットワークが生かされています。

UKRAINE

【場所：ウクライナ キーワード：ウクライナ人道危機】

ウクライナ人道危機により避難生活を送る人々を対象にした巡回診療。日赤は、資金や物資、医療サービス支援のための人員派遣を継続しています。写真は、日赤国際部職員の矢田結さん（左から2人目）が、避難民の方の現状や巡回診療の感想についてなどの話を聞いている様子。生活インフラが整わず、支援が行き届かない村への巡回診療は、必要不可欠な活動です。

ETHIOPIA

【場所：エチオピア キーワード：スーダン人道危機】

スーダンの各地域で発生した紛争から避難した子どもに、食事を手渡すエチオピア赤十字社のボランティア。スーダンでは国内の医療施設の多くが機能不全の状態にあり、医療や物資の支援が必要とされています。また、避難民の多くが女性や子どもであるため、家族が離ればなれになってしまうリスクを周知し、彼らを保護するシステムの構築も急務となっています。

BANGLADESH

【場所：バングラデシュ キーワード：バングラデシュ南部避難民】

バングラデシュでの避難民の子どもたちに対するこころのケア活動。ミャンマー・ラカイン州での暴力から逃れるため約100万人が避難している同国では、発生から6年目を迎え、将来の見通しが立たない不安な日々が続いています。制限の多い環境下でも希望をもって生活できるよう、避難民自らもボランティアとして支援活動に取り組んでいます。